

初級・中級の日本語学習者の文章表現について

—中国人留学生・韓国人留学生の事例—

秋口まどか 鄭 賢熙

1. 問題の所在と本稿の位置づけ

日本語学習者の作文は、短文を作成する際には問題なく書けていても、ある一定のまとまった文章を書くと、わかりにくい文になってしまうことが多い。また、日常会話における日本語に関しては、まったく問題ないと考えられる留学生が、客観的な文章表現が要求されるレポートなどを書く際、非常にわかりにくい文章を書いたりする場合がある。池上(1983)は、わかりにくい文になってしまう理由として、1. 全体構造の視点が欠けている、2. 談話展開を考慮して書かれていない、という2点をあげている。また田代(1995)では、「中上級日本語学習者の文章表現は、語彙や文型が豊かになってくる一方で、文意の伝わりにくいものが増えている。また、文法的な誤りを訂正してみても、その文章が日本語母語話者にとってどこか不自然でわかりにくいものになることがある。」と述べている。

これらの先行研究を参考に、どのような作文指導が留学生のレポートなどの論文作成に役立つ指導になるかということが、筆者たちの大きな研究テーマである。よって、本稿では、この研究テーマの予備的な調査として、新潟大学の留学生の作文と日本人学生の作文の分析・考察を試みた。

2. 調査の題材

音声のない3分程度の映像ビデオを利用した。

ビデオのストーリーは以下のとおりである；

一人の男が車を運転しながら、手紙に切手を貼ろうとしている。切手を口の中に入れていたところ、間違っって飲み込んでしまう。それに気付かない男はポストの前で切手を貼ろうと口の中を探すが切手は見つからない。その時、両手にたくさんの荷物を持った女性が手紙を入れにやって来る。男は女性を手伝うふりをして手紙を受け取り、女性が立ち去ってから切手をはがそうとする。しかし、切手はなかなかはがれない。車のエンジンの蒸気を使って切手をはがすことに成功する。次に自分の手紙に貼ろうとするがのりがなく付かない。ポケットの中にあった飴を使って切手を貼ることができた。郵便屋さんが回収に来たので、男が手紙を出そうとすると先程の女性がまた戻ってきた。

ちょうどその時、女性の手紙が風で飛ばされ女性の足元に落ちる。それを見つけた女性は驚き、郵便屋さんに駆け寄るが無視される。慌てた男はポストに隠れる。

3. 被調査者

1. 日本語学習者（以下、学習者とする）：

新潟大学（正規学部生、研究生及び大学院生）で学ぶ初中級の中国語母語話者10名（男性2名、女性8名）韓国語母語話者20名（男性11名、女性9名）に協力を得た。

学習者のレベルは、中国語母語話者は初級5名、中級以上5名、韓国語母語話者は初級9名、中級以上11名である。レベル分けの基準はプレメントテストによって決められる大学のクラスを基準とした。

今回の調査は中国語母語話者と韓国語母語話者のみにしぼった。日本語非母語話者を中国語母語話者と韓国語母語話者したのは、新潟大学の留学生の総数約420人のうち、その半分が中国語母語話者であり、次いで多いのが韓国語母語話者であるので、まず中国語母語話者と韓国語母語話者の文章表現について調査を行った。

2. 日本語母語話者：

新潟大学の学生10名（男性5名、女性5名）に協力を得た。

4. 調査の内容

日本語母語話者、日本語学習者（以下、学習者）それぞれに3分程度の音声のないビデオを2回見てもらい、その後、ビデオの内容を400字程度の作文にして書いてもらった。作文には自分の感情や感想は一切入れずに、内容だけを書いてもらうように指示した。辞書の使用は認めず、内容に関する質問には一切答えなかった。書いてもらった作文の一部を抜粋して、日本語母語話者と学習者を比較し、テ形接続の数、視点、日本語母語話者に多い表現、学習者に多い表現を分析した。なお、作文の一部を抜粋した理由は、全体よりも焦点を絞って見たほうがより展開の仕方や接続の仕方を見るのにわかりやすいと考えたからである。その抜粋した部分は、全体の中で最も複雑な場面展開であり、接続節も多く見られるところである。

抜粋した部分：

「その時、両手にたくさんの荷物を持った女性が手紙を入れにやって来る。男は女性を手伝うふりをして手紙を受け取り、女性が立ち去ってから切手をはがそうとする。しかし、切手はなかなかはがれない。車のエンジンの蒸気を使って切手をはがすことに成功する。次に自分の手紙に貼ろうとするがのりがなく付かない。ポケットの中にあった飴を使って切手を貼ることができた。」

5. 結果・分析

分析においては ①テ形接続と連用接続、②視点、③日本語母語話者に多い表現・学習者に多い表現、④文の構成についての四つの点で分析を行った。

5. 1. 学習者のテ形接続と連用中止形接続

複文に使用される接続にはいろいろな種類があるが、中でもテ形接続と連用中止形接続が日本語の文章の中で一番多く使われている。田代（1995）では、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人学習者とする）の作文における接続では、日本語母語話者と比較して、テ形接続の割合が非常に高く、動詞連用形接続はあまり使用されないという事が指摘されている。また、学習者がテ形を多用する原因としては接続の形式を用いずに文をつないでいくことができる中国語の接続を「テ」に置き換えているからであると述べられている。また、韓国語話者（以下、韓国人学習者とする）の場合、テ形に該当するいくつかの母語が存在するため、テ形が多用されると述べられている。さらに、韓国語と日本語とでは「テ」の意味、用法にずれがあるため、場合によって誤った接続の原因になりうる。

今回の調査においても同じような結果が出た。日本語母語話者はテ形接続よりも連用中止形接続を多く用いるのに対して、学習者は、テ形接続を用いる傾向があった。わかりやすい日本語を書くためには連用中止形接続と、テ形接続の用法を理解し、適切に使う必要がある。寺村（1981）ではテ形接続と連用中止形接続の違いについては、テ形接続が話しことば的であるのに対し、連用中止形接続は書き言葉で多く用いられる点、また、テ形接続が前件と後件が連続であるのに対し、連用中止形接続は前後が独立していると述べられている。田代（1995）では、学習者がテ形接続を多く用いる時の問題点として、一文中で動作主体がかわった場合は「テ」の接続では不自然になると述べている。今回の調査では学習者の書いた作文の中に一文中に動作主体がかわったものはなかった。

一方、表1のように、日本語母語話者が連用形接続を多く用いるのに対して学習者は極端に少なかった。この理由として、連用中止形接続がテ形接続よりも文語的な表現であると日本語話者自身が認識しているからであると考えられる。一方、韓国語話者で連用中止形接続が見られる文は中級以上だけではなく、初級にも同じ割合で見られる。それは学習者も連用中止形接続が文語的表現であると認識しているからと考えられる。しかし、実際には連用中止形接続を正しく使用できていない。

作文指導において連用中止形接続の使用を多くするように指導することが必要であろう。さらに、連用中止形接続の正しい使用のための指導が必要であろう。

表1

| | 日本語母語話者 | 中国語話者(学習者) | 韓国語話者(学習者) |
|---|-------------|--------------|-------------|
| ① | 連用中止形接続 23個 | テ形(継起) 19個 | テ形(継起) 39個 |
| ② | テ形(継起) 13個 | テ形(原因・理由) 3個 | 連用中止形接続 12個 |
| ③ | テ形(手段) 2個 | 連用中止形接続 7個 | テ形(手段) 10個 |

5. 2. 視 点

視点については、先行研究では視点を考える場合、〈視座〉=見る場所、どこから見るのか、〈注視点〉=見られる対象、どこを見るのか、とに分けて分析することの必要性を述べている。(松木1992) 田代(1995)は、視座を決める要素として、受身表現、授受補助動詞(～てもら、～てくれる、～てやる)、「くれる、もら、あげる、」などの授受動詞などがある構文を手がかりとして見ているが、本稿は、田代(1995)と渡邊(1996)の方法を参考に以下のように設定した。

*注視点について：

- ・文の最初から最後まで一人の人物の動きに注目している場合を「固定注視点」とする。
- ・複数の人物の動きに注目している場合を「移動注視点」とする。

*視座について：

視座の決め方は注視点と「視座の手がかりとなる構文」の有無によって決まる。

「視座の手がかりとなる構文」は、受身表現、授受補助動詞(～てもら、～てくれる、～てやる)、「くれる、もら、あげる、」などの授受動詞が現れる文とする。

- ① 注視点移動で、「視座の手がかりとなる構文」がある場合：
視座がある登場人物に寄っていると考え。
- ② 注視点移動で、「視座の手がかりとなる構文」がない場合：
視座が等距離であると考え。
- ③ 注視点固定で、「視座の手がかりとなる構文」がある場合：
視座がある登場人物に寄っていると考え。
- ④ 注視点固定で、「視座の手がかりとなる構文」がない場合：
視座が登場人物から遠い位置にあり1つの焦点を持っていると考え。

日本語母語話者の作文を例にして注視点《 》と視座【 】を見ていく。

下線部は「手がかりとなる構文」である。

(日本語母語話者の作文例)

重い荷物を持った女の人が、手紙を出そうとポストの方へ歩いてきた。《女の人が注視点》
【主人公からの視座】男はその手紙を代わりにポストに入れてあげるふりをして【主人公からの視座】、その女の人の手紙にはあってあった切手を取ろうとする。《主人公が注視点》しかし切手がなかなかはがれないので自分の車のボンネットをあけて蒸気で無理矢理はがし、粘着力がなくなった切手に、なめかけのあめをつけて、なんとか無事に自分の手紙に切手をはる。《主人公が注視点》

この日本語母語話者の作文では、注視点は《女の人⇒主人公》と移動している。視座は「手がかりとなる構文」から主人公である。これと同じ方法で日本語母語話者、中国人学習者、

韓国人学習者すべての作文を調べた。

文章表現の場合は口頭表現とは違い日本語母語話者、学習者ともに注視点は移動するが、視座は日本語母語話者は主人公を視座にしたものが多く、学習者は主人公以外を視座にしたものが多いということが述べられている。(田代1995)

今回の調査では、日本語母語話者は移動注視点で「視座の手がかりとなる構文」から視座は主人公という結果が出た。学習者の場合、中級学習者は日本語母語話者と同じで移動注視点で「視座の手がかりとなる構文」があり、視座は主人公であった。一方、初級学習者は移動注視点であったが、「視座の手がかりとなる構文」はほとんど見られなかった。従って、初級学習者の視座は登場人物のいずれからも等間隔の位置にあり中立な立場から文を書いていると言える。

この結果から、初級学習者が日本語母語話者とは違った視座から文章を書いていることが、日本語母語話者が読んだ時にわかりにくい原因になっていると考えられる。

表 2

| 視 座 | 日本語母語話者 | 中国語母語話者 | 韓国語母語話者 |
|-----|---------|---------|---------|
| 主人公 | 8人 | 5人 | 10人 |
| 中 立 | 2人 | 5人 | 10人 |

5. 3. 日本語母語話者に多い表現・学習者に多い表現

日本語母語話者の多くが使った表現として、「(手紙を) 入れるふりをする」「蒸気で切手をはがす」「切手をはがそうとする」「切手を貼る」がある。これらの表現はほぼ全員の日本人が書いた。一方で学習者は「切手を貼る」以外の表現はあまり使用しておらず、語彙の不足が考えられる。学習者に多い表現として「切手を取る」「切手を貼る」がある。共通するものとして「切手を貼る」があるが、これは中国語にも同じ言葉がある為と考えられる。また、日本語母語話者は「(手紙を) 入れるふりをする」というところで「ふりをして～」と後続くように書いているのに対して学習者の多くは二段階にわけて書いていた。

中国語からの影響としてポストを「郵筒」と書いている人が、学習者に多く見られた。これは、「ポスト」が日常によく使われる語彙であるにも関わらず学習者(中国語母語話者)が、カタカナで書く語彙(外来語)を使用せずに漢字で書こうとする傾向が原因の一つにあると思われる。韓国人学習者の場合も母語の影響を受けた表現が見られた。とくに初級の学習者に多く見られたが、例えば、「女の人」、「女性」などを韓国語表現である「여자」をそのまま日本語の表現にすることや、「そのとき」「そのあと」などの接続詞が多く見られた。それもおそらく韓国語からの影響だと考えられる。中級以上の学習者の場合多く見られる表現は自動詞、他動詞の使い分けがきちんとできていないことや受身表現の使い方の誤用などである。

5. 4. 文の構成について

次に、文の構成について考察する。

内容を大きく分けて3つに分けることにする。1つ目は「～手紙をいれるふりをする」、2つ目は「切手をはがす」、3つ目は「切手をはる」に分けた。

それから、この3つを基にしてそれぞれの作文を分類した。分類は以下の通りである。

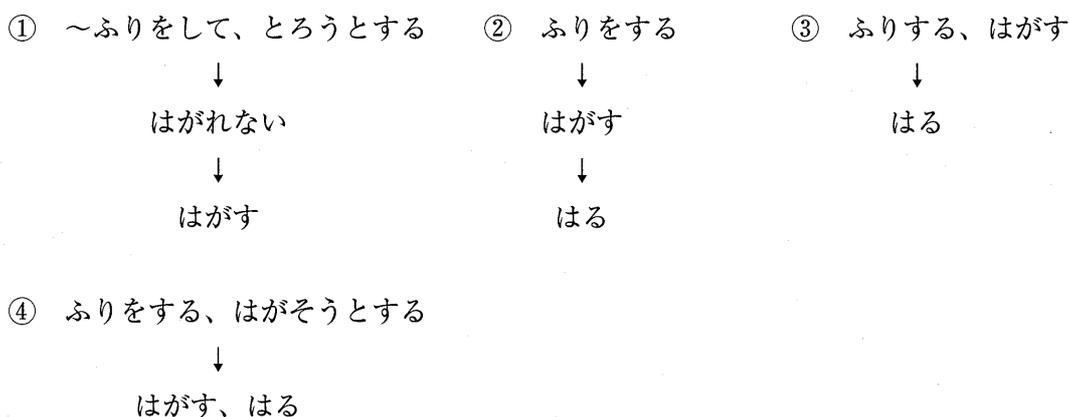


表 3

| | ① | ② | ③ | ④ |
|---------|----|-----|----|----|
| 日本語母語話者 | 1人 | 2人 | 3人 | 4人 |
| 中国語母語話者 | | 2人 | 1人 | 3人 |
| 韓国語母語話者 | | 10人 | 2人 | 5人 |

④は日本語母語話者、学習者共に、多くの人が使った展開である。日本語母語話者と学習者を比較すると、日本語母語話者の場合は前半と後半の文の量が大体同じ位で書いていると言える。また、文の数も少ない。一方、中国人学習者の場合、前半と後半の文量の差が大きい傾向がある。韓国人学習者の場合は日本語母語話者と同じく、前半と後半の文量はほぼ同じであったが、文の数は平均して多かった。

③は日本語母語話者に多く見られた展開であるが、これも前半、後半で情報量が同じであると考えられる。初級の韓国人学習者と中国人学習者の文に見られるパターンであったが、語彙数や情報量が少なかった。

②は日本語母語話者、中国人学習者ともに2人ずつであるが、日本語母語話者は3つに分けた分量がだいたい同じだった。韓国人学習者に一番多い構成で、初級、中級レベルともに多い。また、極端に文の量がちがうものが多く、全体として文の数も多い。中国人学習者も同様の結果が出た。

これらの結果から、日本語母語話者は文の量のバランスが取れているのに対して、学習者は日本語母語話者と同じように展開していたとしても中身の文の量のバランスが悪いと言える。中・上級話者の中でも特にわかりやすい判断された作文はやはりバランスがよかった。

また、初級者であっても少しわかると判断された作文は文の量のバランスが取れていた。

6. 作文指導に関する課題

5で行った分析から、作文指導に関して、以下のようなことが言える。

1. テ形接続や連用接続についての指導の工夫をしなければならない：

初級学習者は短文レベルの作文が多いので、複文の作文が書けるように指導を行わなければならないが、中級学習者になると、テ形接続が多くなり連用接続が少ない傾向があるので、それを改善するような指導をしなければならない。

2. 視座については、文を構成して長い文章を書く際に必要なものであるので、ある程度視座を意識させるような指導を実施しなければならない：

初級学習者の場合、「視座のてがかりとなる構文」が非常に少なかったので、「視座のてがかりとなる構文」の要素である、受身表現、授受補助動詞（～てもらう、～てくれる、～てやる）、「くれる、もらう、あげる、」などの授受動詞などを使いさらに、視座を意識させるような指導が必要であると考えます。また、中級学習者の場合は、今回の調査では、日本語母語話者と変わらない視座の現れ方をした。

3. 語彙学習に関しては、当然のことながら、継続的に実施していかなければならない。

初級学習者は語彙の不足や不正確さのためにわかりにくい文を書いていた。同様に、中級学習者においても、ある表現を知らないまたは知っていても使えないことが、わかりにくさの原因になっていた。

4. 文の量または情報量についてのバランスを、作文指導の中で提示しなければならない。

自由作文の場合はその人なりに重要だと考える部分も異なり、文の量のバランスを考えると必要はないと思うが、今回のように描写文を作文する時には、情報量のすべてをバランスよく書いていくことが、客観的に記述するという意味で重要ではないかと考える。

さらに、上述の4点に付け加えて言えることは、わかりにくいと判断された初級学習者の作文を見ていくと、語彙の不足、語彙を適切に使用していない、情報量の不足、単文が多いなどの特徴がある。また、いくら情報量が多くても語彙が正しく選択されていなければわかりやすい作文を書くことはできないということである。語彙は正しく選択されていても情報量が少ないとわかりにくくなる。先行研究では、初級学習者の作文指導でも談話展開の仕方を教えることの重要性を主張している（門脇 1999など）。しかし、語彙の導入、語彙の適切な使用、複文を作らせる、などと言った従来から行われている指導と、長文としての談話展開の仕方の指導の両方をバランスよく同時にしていく必要があると考える。具体的に言えば、初級段階から、短文レベルの作文指導と長文レベルの作文指導の両方を行い、短文レベルでは正確さを中心に指導を行い、長文レベルでは文の結束性などといった談話レベルの指導を行っていくことが、作文技術を高めることにつながると考える。

7. 今後の課題

本稿は、予備的な調査であったため、データ数も少なく、また、中国語母語話者、韓国語母語話者だけのデータであった。今後、データ数を増やし、また、中国語、韓国語以外の母語の留学生のデータも集め、分析を進めていきたい。

また、「わかりにくさ」について、何が要因で「わかりにくさ」を産むのかも明確にしていきたい。さらに、語彙的にも文法的にも間違っていないのに、日本語母語話者が読むとなんとなく「不自然」に感じる作文もあるが、「わかりにくさ」と同時に「不自然さ」についても、両者の相違点等の研究をすすめていきたい。

引用文献：

- 池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』 pp. 6-42 国立国語研究所
- 門脇薫 (1999) 「初級における作文指導 - 談話展開を考慮した作文教材の試み -」『日本語教育』 102号 pp. 50-51
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習の文章表現の問題 - 不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる」『日本語教育』 85号 pp. 25-37
- 松木正恵 (1992) 「『みること』と文法研究」『日本語学』 pp. 9-11 明治書院
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』 pp. 11-18 くろしお出版

The learners of Japanese do not have any problem writing short compositions. But in the case of longer compositions they become too complicated and confusing.

Besides, even those foreign students who master daily conversation, when writing a formal report form compositions, which are difficult to understand.

The aim of this study is to find out how the advisers of the foreign student consult them on the structure and composition of students thesis and other papers.

Results of the study are as follows ;

- 1 . The Japanese learners use the conjunctive particle *-te* more frequently than native Japanese speakers.
- 2 . As for the viewpoint of the description native Japanese speakers tend to use a fixed viewpoint of the main character. But the Japanese learners use different standpoints at the same time, which becomes confusing.
- 3 . Comparing to native Japanese speakers, the compositions of the learners are unbalanced.